

## 地中海近現代史の試み

小山 吉亮

「ピレネーを越えるとアフリカが始まる」と言われるが、ヨーロッパ比較政治史の文献ではスペインとポルトガルが除外されることが少なくない。アルプス以北の社会を念頭に置いた枠組は、ピレネー山脈の南には当てはまらないことが多いのである。カトリック・プロテスタント圏ではないバルカン半島も同様の理由で対象から外されやすい。

さて、筆者の専門はファシズム時代のイタリアである。さすがにイタリアはヨーロッパに入れてもらえるだろうと思っていると、どうも雲行きが怪しい。アルプス以北の枠組では南イタリアをうまく説明できないのである。ここで研究者は二択を迫られる。南イタリアを無視して北部・中部だけを分析の対象とするか、それとも統一的な枠組を無視してイタリア全体について論じるか。いずれにしてもイタリアをヨーロッパ比較政治史に組み込むのは意外と簡単ではないのだ。

そういえば19世紀の北イタリアでは「遅れた」南部を「アフリカ」と呼ぶ者もいた。もちろんこのような言説には差別的な色彩がつきまとっているのだが、南イタリアやイベリア半島がアフリカの北部と何らかの共通点を持つのも事実である。それならばイベリア、イタリア、バルカンの3半島を北アフリカとセットにしてみてもよいのではないか。こうして地中海という枠組が浮上することになる。

では、地中海という「眼鏡」を通すとこの地域の近現代史はどのように見えるのだろうか。まず、東地中海ではオスマン帝国の解体が進行する。一方、西地中海では北岸の国々が南岸を植民地化していった。地中海の中央ではジブラルタルに加えてマルタとキプロスがイギリスの植民地になり、エジプトと

パレスチナもこの列に加わった。筆者の専門である1920年代になると、北岸ではトルコ、イタリア、スペインという3つの独裁が成立する。西地中海では北岸諸国に対する南岸の抵抗が生じ、ス

ペインはモロッコのリーフ共和国、イタリアはリビアのサヌシー教団と戦闘状態に陥った。英領の島嶼部でも北岸との関係が焦点になった。マルタではイタリアとの関係をめぐって紛争が生じ、キプロスではギリシア系とトルコ系の対立が激化する。これらの事象の関係はほとんど意識されてこなかったが、その関連性については検討の余地があるのではないだろうか。

…と大風呂敷を広げてはみたものの、この議論とイタリア・ファシズム研究とを結びつけるのは至難の業である。まずは地中海研究の基本概念であるクライエンテリズムを手掛かりにして、イタリア・ファシズムを位置づけ直すところから作業を始めている。

(法学部助教)

